

筑波大学 情報学群 情報メディア創成学類

卒業研究論文

卒業論文の書き方

清野 駿

指導教員 若林 啓

2024年3月

概要

わああああああこの文書は、筑波大学情報学群情報メディア創成学類の卒業研究論文本体のサンプルである。このファイルを書き換えて、この例と同じような書式の論文本体を \LaTeX を使って作成することができる。

このサンプルは、学生諸君が面倒な位置決めをして表紙を作成する手間を軽減するために提供している。もちろん、このサンプルで示す表紙は例であり、要項や手引きに準拠していれば、このファイルに頼らずに自分で表紙の位置決めを行ってもよい。

目次

第1章	はじめに	1
第2章	形式	2
2.1	表紙	2
2.2	本体	2
	謝辞	4
	参考文献	5

図 目 次

2.1 図の例 (graphicx パッケージを使用)	3
---------------------------------------	---

第1章 はじめに

研究の内容や分野によっては書き方が異なる場合もあるので、詳しいことは指導教員に聞くとよい。この文書は主にタイトルの作成方法と、論文の体裁を示すのみであり、どうやったらよい論文になるかの示唆は含まれていない。

第2章 形式

ここでは、論文の表紙および本体の記述方法について述べる。

2.1 表紙

表紙は、`\maketitle` によって作成するため、以下の項目に相当する文字列をそれぞれ記述する。

題目: 題目は `\title` に記述する。行替えを行う場合は `\\` を入力する。ただし、題目の最後に `\\` を入力するとコンパイルが通らなくなるので注意する。なお、4 行以上の題目の場合、表紙ページがあふれるためスタイルファイル“`mast-jp-xxx.sty`”を変更する必要がある（xxx は使用文字コードに合わせて `euc`, `sjis`, `utf8` のいずれかになる）。

著者名: 著者名は `\author` に記述する。

指導教員名: 指導教員は `\advisor` に記述する。

年月: 年月は `\yearandmonth` に記述する。

年月は別途指示された場合はそれにしたがう（指示がなければ提出時のものを記述する）。

2.2 本体

本体は 1 段組で記述する。

図表には番号と説明 (caption) を付け、文章中で参照する。表 2.1 と図 2.1 はそれぞれ表と図の例である。表の説明は上に、図の説明は下にかくことが多い。図の挿入に用いるパッケージについては使用環境に合わせて自由に選択してほしい。

表 2.1: 表の例

年 度	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
1995	85	92	86	88
1996	83	89	90	102
1997	88	87	91	112
1998	144	93	90	115

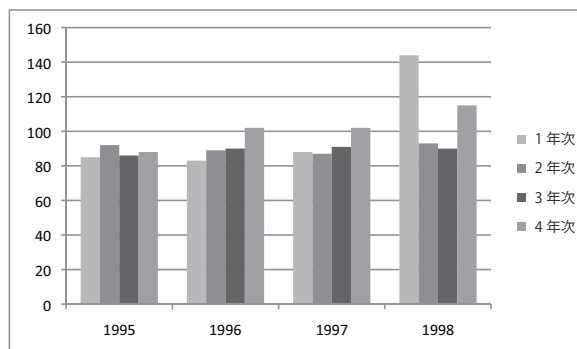


図 2.1: 図の例 (graphicx パッケージを使用)

詳しくは参考書 [1, 2]などを参照のこと。奥村晴彦氏の「 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Wiki」<https://texwiki.texjp.org/>は日本語の $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ に関する情報が充実している。具体的な文献の参照例として本の例 [3]、雑誌論文の例 [4]、予稿集の例 [5] を挙げておく。

謝辞

必須ではないが、書くことが望ましい。
研究補助を受けている場合、他に指定がなければここに書く。

参考文献

- [1] 奥村晴彦: LaTeX2e 美文書作成入門 改訂第 5 版, 技術評論社, 2010 年.
- [2] 吉永徹美: LaTeX2 ϵ 辞典, 翔泳社, 2009 年.
- [3] Colin Ware: Information Visualization — Perception for Design (Second Edition), Morgan Kaufmann Publishers, 486 pp., 2004.
- [4] Miriah Meyer and Tamara Munzner: MizBee: A Multiscale Synteny Browser, *IEEE Transactions on Visualization and Computer Graphics*, Vol. 15, No. 6, pp. 897–904, 2009.
- [5] Emerson Murphy-Hill and Andrew P. Plack: An Interactive Ambient Visualization for Code Smells, in *Proceedings of the 2010 International Symposium on Software Visualization (SOFT-VIS' 10)*, pp. 5–14, 2010.